

くすり一口メモ

転倒転落事故に關与する薬劑

高齢化の進む日本において、転倒転落事故は骨折による寝たきりや心理的不安を引き起こすことで患者さんのQOL (Quality of Life) 低下につながる重要な問題です。転倒転落の事故要因は、環境などに起因する外因的要因と、疾患や服用薬劑に起因する内因的要因に分けられます。今回は内因的要因である薬劑についてまとめました。

中枢神経を抑制する薬劑は、患者の運動神経を鈍らせ転倒転落事故を引き起こします。睡眠薬はその作用時間と特徴によって使い分ける必要があります。ベンゾジアゼピン (BZ) 系、非BZ系の作用点はGABA受容体のBZ結合部位 (受容体) ですが、そのうち、1受容体は睡眠に、2受容体は筋弛緩、抗不安作用に關与しています。患者さんが不眠のみを訴えるのであれば、1受容体選択的な薬劑を選ぶことでふらつきなどの副作用を軽減することができます。

抗精神病薬による転倒転落には錐体外路症状とふらつきが主に關連していると考えられています。ふらつきの原因には、アドレナリン 1受容体とヒスタミンH1受容体が關与しており、1受容体の遮断による起立性低血圧、H1受容体遮断による過鎮静がふらつきを誘発します。どちらも投与初期にふらつきの副作用が起こりやすいとされていますが、薬劑の増量や追加の際にも投与初期と同じように気をつけなければなりません。

悪性腫瘍も転倒のリスクファクターの一つです。悪性腫瘍はその病状から中枢神経・末梢神経障害が起こります。また抗がん剤の中にはアルカロイド系や代謝拮抗薬など歩行障害・歩行困難の副作用が添付文書に明記されているものもあります。病状とあわせて投与中の薬劑にも注意が必要です。

中枢神経系に作用する薬劑だけでなく、利尿薬や降圧薬の影響も無視できないとする報告もあります。降圧薬は起立性低血圧を引き起こし、利尿薬・下剤はトイレへの移動回数を増加させます。転倒転落事故はトイレまたはトイレへの往復時における発生率が高いことを考えると、どちらの薬も転倒転落事故に大きく關わるものであり、これらの薬劑を服用されている患者さんにも注意を向ける必要があります。

以下に転倒転落に關する薬劑をまとめました。ご参考にしてください。

原因となる作用・副作用	主な薬物
眠気、ふらつき、注意力低下	睡眠薬、抗不安薬、バルビツール酸系薬、抗精神病薬、抗ヒスタミン薬、抗アレルギー薬、麻薬性鎮痛薬、非ステロイド性鎮痛薬など
低血糖	糖尿病薬 (インスリン、経口血糖降下薬)、ガチフロキサシン (ニューキノロン系抗菌薬)、ジソピラミド、シベンゾリン (抗不整脈薬)、非選択性遮断薬など
起立性低血圧、失神、めまい	三環系・四環系抗うつ薬、フェノチアジン系抗精神病薬、降圧薬 (ACE阻害薬、遮断薬、遮断薬、利尿薬)、排尿障害治療薬、硝酸薬など
めまい (内耳障害)	アミノグリコシド系抗菌薬、ミノサイクリン、点耳抗菌薬 (フラジオマイシン、クロラムフェニコール、ゲンタマイシン、ポリミキシンB) など
ふらつき (運動障害)	抗てんかん薬、抗がん剤など
視力低下	抗コリン作用のある薬物、エタンブトール、リファンピシン (抗結核薬)、ポリコナゾール (抗真菌薬)、抗がん剤 (タモキシフェンクエン酸塩、オキサリプラチンなど)、クロラムフェニコール、シクロスポリン、アミオダロンなど
筋弛緩作用、脱力	筋弛緩薬、ベンゾジアゼピン系睡眠薬、抗不安薬など
せん妄状態	パーキンソン病治療薬、ベンゾジアゼピン系睡眠薬、抗不安薬、三環系抗うつ薬、麻薬性鎮痛薬、H ₂ 遮断薬、遮断薬、ジギタリス製剤、抗不整脈薬、抗コリン作用を持つ薬物など
パ・キンソン症候群	抗精神病薬、抗うつ薬、制吐薬、胃腸機能調整薬、レセルピンなど
頻尿、下痢	利尿薬、便秘薬、浣腸、抗がん剤 (イリノテカン塩酸塩、フルオロウラシル) など

【参考資料】月間薬事 vol.51 No.12 2009.11
(鹿児島市医師会病院薬劑部 平松さやか)